

民族衛生学研究資料

—第2報 青年層の民族衛生についての認識度(統)—

武 部 啓

1 緒 言

本報は、本紀要前号記載の第1報¹⁾に引き続いて行なった、主として優生学方面の調査の結果である。調査の立案及び実施は、第1報に準じて、亜細亜大学の武部研修(民族衛生学)の学生約120名の協力のもとに行なった。調査項目はあとで述べる15で、面接アンケート方式によって昭和43年の冬期休暇を中心に、もっぱら学生達の帰省先で調査票4263が集められた。

2 調査の対象

第1報では、大学生及び彼等と同年輩の社会人に限定して18~25歳の青年男女を対象としたが、今回は年齢を少し広げて17~27歳とした。その理由は、下への拡張は、高校でも上級生になると当然こうした問題を真剣に考えるべきであり、一方上への拡張は、実際問題として何らかの理由で留年中の大学生がかなりいるからということである。

こうした年齢層で回収された調査票は、先にも述べたように、4263である。しかしあとで述べる理由で1356票を除外したので、本報告では2907名(男性1668名、女性1239名)が対象となる。それを年齢別に分類すると表1のようになる。

表 1

年 齢	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	計
数	231	463	519	637	319	269	201	113	68	51	36	2907
%	8	16	18	22	11	9	7	4	2	2	1	100

さらにこの2907名を学生・社会人・男性・女性に分けると表2のようになる。

表 2

	学 生	社 会 人	計
男	992 (34%)	676 (23%)	1668 (57%)
女	735 (25%)	504 (18%)	1239 (43%)
計	1727 (59%)	1180 (41%)	2907(100%)

調査の地域は日本全土、すなわち46都道府県及び沖縄にわたっている。これら地域によって調査人員にかなりの差があり、関東を第1に、北海道・東北・関西の順になっているが、これは調査の実施にあずかった学生達の出身地を反映しただけのもので、調査の意味づけに格別の関係はないものとして特に吟味はしなかった。

3 調査の方法及び項目

調査の方法は、第1報と同様に、原則として面接形式で、誘導質問にならないように注意して“はい” “いいえ” で答えさせるアンケート方式をとった。ただし項目②では“はい” “いいえ” では不十分なため、3つの問いの1つに○をつけさせる方法をとった。

記入は原則として調査に当たった学生自らが行った。その際、字句の解釈や質問内容の説明は一切禁じた。ただし記入を終えたのち、できるだけ質問事項について話し合い、なぜそう答えたかなどを詳しく聞きそれを記録しておくようにした。あとで述べる“聞き込み”というのは、そうした記録によるものである。

調査の結果は、学生と社会人に分け、さらにそれらを男性と女性とに分けた。しかし今回は、男女の差よりも学生と社会人との比較に重点をおいた。それというのは、大学での一般教養がどの程度までに民族衛生に関する知識と関心を深めるのに役立つかを知ることが、調査の目標の1つであったからである。

調査項目として次の15を選んだ。

- (1) あなたは自分の家系の遺伝について何か心配になることがあるか——（はい、いいえ）
- (2) [(1)の問いに“はい”と答えたものに] それは精神上のことか、身体上のことか、それともその両方か——（精神、身体、両方）
- (3) [(1)の問いに“はい”と答えたものに] その心配を解消する方法があると思うか——（はい、いいえ）
- (4) あなたは結婚するとき遺伝のことを考慮するか——（はい、いいえ）
- (5) [(4)の問いに“はい”と答えたものに] その際健康診断で異常がなければ遺伝上安心だと思うか——（はい、いいえ）
- (6) 知能や才能は遺伝すると思うか——（はい、いいえ）
- (7) いとこ結婚は避けた方がよいと思うか——（はい、いいえ）
- (8) 血友病とはどんな病気か知っているか——（はい、いいえ）
- (9) 進行性筋ジストロフィとはどんな病気か知っているか——（はい、いいえ）
- (10) 精神分裂病とはどんな病気か知っているか——（はい、いいえ）
- (11) [(10)の問いに“はい”と答えたものに] この病気は遺伝すると思うか——（はい、いいえ）
- (12) 躁鬱（そううつ）病とはどんな病気か知っているか——（はい、いいえ）
- (13) [(12)の問いに“はい”と答えたものに] この病気は遺伝すると思うか——（はい、いいえ）
- (14) 精神薄弱とはどんな病気か知っているか——（はい、いいえ）
- (15) [(14)の問いに“はい”と答えたものに] この病気は遺伝すると思うか——（はい、いいえ）

4 調査の結果

回収された調査票4263から、前回同様に、ある項目について無回答のも

22 武 部 啓

の及び“分らない”という無回答に準ずるものは、不適當なものとして集計から除外した。その理由は、この年齢の青年がこんな形式でこの程度の質問をうけて答えられないのは、知能の上でかあるいは誠実さの点で、調査の対象には不適當と判断しようという学生達の意見に従ったからである。

残った2907名から得られた数量的な結果を客觀的に述べるのが本報の主な目的であるから、主觀的な説明は最小限度にとどめる。ただし調査に當って採集してきた“聞き込み”の中で、特に資料として参考になると思うものはその都度書きそえることにする。

(1) あなたは自分の家系の遺伝について何か心配になることがあるか
—— “はい” と答えたもの (表3)

表 3

	学 生	社 会 人	計
男	115 (13%)	54 (8%)	169 (10%)
女	98 (13%)	46 (9%)	144 (12%)
計	213 (13%)	100 (8%)	313 (11%)

2907名の青年男女のうち、11%が自分の家系の遺伝のことが心配であるというのは、数字が大きすぎるように思われる。それが彼らの本心であるならば、優生学的にはむしろ意を強くすることである。しかし以下の項目に対する答に照らしてみると、いささか誘導質問に対する優等生の回答めいたものを感じる。

それはともかく、学生では男性・女性ともに13%であるのに対し、社会人では男性8%、女性9%と4~5%低い。特に学生の家系に遺傳的疾患が多いわけではあるまいから、この差は学生と社会人の間の遺傳についての意識ないし知識の差を示すものであろう。学生・社会人とも男性と女性との間に差のないことも、このことを裏づけているように思われる。

(2) [(1)の問いに“はい”と答えたものに]それは精神上のことか、身体上のことか、それともその両方か——“精神・身体・両方”の分布(表4)

表 4

		精 神		身 体		両 方	
学 生	男	67(58%)	117(55%)	41(36%)	75(35%)	7(6%)	21(10%)
	女	50(51%)		34(35%)		14(14%)	
社会人	男	19(36%)	29(29%)	28(52%)	58(58%)	7(12%)	13(13%)
	女	10(21%)		30(66%)		6(13%)	

はっきりしたことは、学生の心配が男女ともに主として精神上のことであるのに対し、社会人のそれは男女ともに身体上のことが多い。この顕著な差は何によるものであろうか。

この項目についての聞き込みで目立つのは、そうした不安を訴えるのは、大学生では1年生が圧倒的に多いことである。入学早々におかれる各種の条件下で不安と焦燥を感じる果てが、自分の精神能力に欠陥がありはしないかと心配になるのは十分にありうることである。これに対し、社会人ことに女性では結婚を前にして、身体上のことが関心事となることもうなずかれる。心配の内容は、精神上のことでは精神の集中困難・記憶力と理解力の減退・漠然とした不満と不安などで、しかもこれは親げずりで治療不可能な宿命といったもの、身体上のことでは肥満・貧血・高血圧・癌・皮膚病などの不安である。その他精神病・血友病・各種奇形などと具体的な遺伝病の心配をあげたものも相当数あった。

(3) [(1)の問いに“はい”と答えたものに] その心配を解消する方法があると思うか——“はい”と答えたもの(表5)

この調査項目は、青年層の優生ないし遺伝についての知識なり認識の程度を知るのに格好のものと興味深く期待したが、調査人数313名では残念ながら参考程度にとどめておかねばならないであろう。

表 5

	学 生	社 会 人	計
男	18 (16%)	28 (52%)	46 (27%)
女	24 (25%)	28 (61%)	52 (36%)
計	42 (20%)	56 (56%)	98 (31%)

それにしても 313 名の 31% に当たる 98 名が、遺伝上の心配は解消できるという明るい希望ないし期待をもっている。聞き込みによると、遺伝という事実は認めるが、科学の急速な進歩によって遠からずその遺伝は消去または変更できると考えているものがほとんどで、自分は致し方ないにしても子孫への心配は慎重な結婚によって解決できるというものはごく少数であった。

いずれにしても遺伝上の心配は解消できるというもの 98 名を色分けすると、学生の 20%、社会人がその 3 倍の 56% である。遺伝についての科学的知識は等しく中学や高校で得たものであろうが、その絶対性に対する態度が大学教育を受けるかどうかで 3 倍の違いをもたらすと考えてよいのだろうか。

(4) あなたは結婚するとき遺伝のことを考慮するか——“はい”と答えたもの (表 6)

表 6

	学 生	社 会 人	計
男	278 (28%)	108 (16%)	386 (23%)
女	228 (31%)	106 (21%)	334 (27%)
計	506 (29%)	214 (18%)	720 (25%)

問いの形としては、自分の遺伝とも結婚相手の遺伝とも特にことわらなかった。それは項目(1)で自分の方の遺伝を心配したものは、この際当然それを考慮に入れるものとして、項目(1)とこの項目との差は相手方の遺伝に

対する考慮を示すものと判断したからである。それがここに25%と11%との差、すなわち13%となって出てきた。

項目(1)で、自分の方の遺伝に不安のもの11%が意外に大きいといったのは、“自分には甘い”という予想がはずれたからである。ところがこの項目で出てきた相手方への考慮13%は、これまた意外にも“相手には辛い”だろうという予想を裏切っている。結婚に当たっては、自分方の遺伝は大目にみても相手方のそれには厳しいのが常であろうと考えていたからである。

男性と女性との差は取り立てていう程のことはないが、学生と社会人との比較では学生が10%上回っている。これも項目(3)で述べた事情によるものであろうか。

(5) [(4)の問いに“はい”と答えたものに] その際健康診断で異常がなければ遺伝上安心だと思うか——“はい”と答えたもの(表7)

表 7

	学 生	社 会 人	計
男	67 (24%)	49 (45%)	116 (30%)
女	22 (10%)	56 (53%)	78 (23%)
計	89 (18%)	105 (49%)	194 (27%)

全体からみると、診断だけで安心だと答えたものが720名の中の27%、逆に言えば一片の診断書では安心ができないと考えるものが73%ということである。これは一見優生学的には頼もしい数字に思える。しかし全体的に考えてみると、実際はまことに心細いことなのである。すなわち家系のことを全く問題にしない遺伝的配慮皆無で結婚するものが、項目(4)からは総人数2901名中2181名もあるので、これを加えると総人数の82%のものが診断書で安心する組となる。言葉を変えれば、正しく優生結婚を考慮している青年は全体の18%に過ぎないわけである。

さらに表7から、調査人数の少ないことに問題はあるとしても、学生が社会人よりはるかに正しく優生結婚を考えているといえる。一方、学生の男性と女性の大きな開きについては、この人数からは何かを言うことを控えねばならないであろう。

それにしても、青年層からかくも絶大な信頼をよせられている“診断書”というもののあり方の、優生学的検討の必要が痛感される。

(6) 知能や才能は遺伝すると思うか——“はい”と答えたもの(表8)

表 8

	学 生	社 会 人	計
男	922 (94%)	575 (85%)	1497 (89%)
女	676 (92%)	459 (91%)	1135 (92%)
計	1598 (93%)	1034 (88%)	2632 (91%)

この項目は、遺伝といえば病的のものだけを重視する傾向をチェックするために設けられた。この結果からすると、現代の青年層はむしろ病的遺伝よりも知能や才能の遺伝に大きな関心をもっていることが明らかである。しかも学生・社会人・男性・女性の間に関心のないことも、その関心の普遍的なことを示す。

ごく僅かながら、知能や才能の遺伝性を否認するものがある。聞き込みによると、彼等も知能や才能を現実によく評価はしているが、それがもればら先天的遺伝的なものとは考えず、むしろ後天的な訓練・努力・経験などによる獲得形質と思ひこんでいるようである。

(7) いとこ結婚は避けた方がよいと思うか——“はい”と答えたもの(表9)

“はい”が96%というのは、優生学的に高く評価されるべきであろう。しかも“いいえ”と答えた残り4%の中に、聞き込みによれば、遺伝学的に全く問題がなければいとこ結婚は必ずしも有害でないからというのが相

当数あるから、これはこれで意を強くする材料である。

表 9

	学 生	社 会 人	計
男	972 (98%)	629 (93%)	1601 (96%)
女	720 (98%)	484 (96%)	1204 (97%)
計	1692 (98%)	1113 (94%)	2805 (96%)

しかし“はい”の中に、いとこ結婚は法律上認められていないからというのがある。他方“いいえ”のほとんどが親子・兄妹・叔父姪の結婚までは法律上禁止されているからという。しかもその中に大学生が加わっているのはどうしたことであろう。実はこの項目を設けた目的の1つは、血族結婚の意味や内容がどの程度理解されているか知りたかったからである。いとこ結婚率の高い(5~6%)²⁾わが国としては、この方面の啓蒙に、いま一段の努力の必要が感ぜられる。

(8) 血友病とはどんな病気か知っているか——“はい”と答えたもの(表10)

表 10

	学 生	社 会 人	計
男	60 (6%)	27 (4%)	87 (5%)
女	29 (4%)	10 (2%)	39 (3%)
計	89 (5%)	37 (3%)	126 (4%)

この項目を設けるに当って、“血友病はどんな病気か”という問いには、この病気の内容である血液凝固機構だとかその遺伝形式の知識までも要求することになりはしないか、従ってまず“血友病という言葉聞いたことがあるか”を問い、それに“はい”と答えたものにこの項目を適用したらという意見もあった。しかし血友病という専門的な病名を知っている

ものは、ある程度その内容についての知識ももっているにちがいないから、項目を2つに分けずに1つでいくことにきめた。それというのは、調査に当たった学生の70%は私の研修に加わってはじめて血友病を聞きまた知り、残り30%は以前にすでにこの言葉を聞き、内容についても一通りの知識をもっていたからである。

この項目を設けた理由も、そうしたいきさつから、血友病を問うただけでも、優生知識ないし優生思想の普及度が判定できるであろうという期待からである。

そうした設問の目標からすると、得られた結果はまことに悲観的で、優生知識の普及度がゼロにひとしいことを示す。もっとも当初心配したように、“いいえ”の中に血友病の知識が不十分だからというものがあるかもしれないと恐れたが、聞き込みによると、実際はそうしたものはほとんどいなかった。

それにしても高等学校で学ぶ遺伝学で、伴性遺伝の代表例に取り上げられているはずの血友病が、この程度にしか認識されていないとはどうしたことであろうか。

(9) 進行性筋ジストロフィとはどんな病気か知っているか——“はい”と答えたもの(表11)

表 11

	学 生	社 会 人	計
男	79 (8%)	41 (6%)	120 (7%)
女	59 (8%)	35 (7%)	94 (8%)
計	138 (8%)	76 (6%)	214 (7%)

この項目も項目(8)と同じ発想によったもので、血友病よりも幾分周知度が高いと考えられるこの病気を重ねて問うたのである。

結果として、血友病よりやや率は高いにしても、あれほどマスコミが取

り上げている社会問題の花形には全くふさわしくない認識度である。

“はい”と答えたものも、身内や知人にこの病気があるので知るようになったものが多いというから、未婚の青年に縁の薄い、人の親だけの問題なのだろうか。身边に現実がない限り、教育もマスコミも効果を発揮しえないとすると、優生思想の普及策に再検討が必要のようである。

(10) 精神分裂病とはどんな病気か知っているか——“はい”と答えたものの(表12)

表 12

	学 生	社 会 人	計
男	972 (98%)	669 (99%)	1641 (98%)
女	706 (96%)	494 (98%)	1200 (97%)
計	1678 (97%)	1163 (99%)	2841 (98%)

学生は男性・女性ともに100%だろうと予想していたのに、社会人より1～2%低いのはなぜだろうかと、聞き込みを検討してみた。その結果明らかになったことは、学生で“いいえ”と答えたのはすべて精神分裂病の症状に詳しくないからという良心的な理由からである。従って、数字上は97%であるが実質的には100%と考えてよいであろう。これに対して、社会人の“いいえ”は正直に知らないものであり、さらに“はい”の中には精神分裂病とは精神病の別名だと理解していたものもあった。

それにしても、青年層における精神分裂病の周知度が予想外に高いことは明らかである。

(11) [(10)の問いに“はい”と答えたものに]この病気は遺伝すると思うか——“はい”と答えたもの(表13)

精神分裂病を知っているといっているものの中で、その遺伝性は認めないとするものが22%ある。遺伝性否認の内容を聞くと、次のように考えて

表 13

	学 生	社 会 人	計
男	836 (86%)	502 (75%)	1338 (82%)
女	551 (78%)	336 (68%)	887 (84%)
計	1387 (83%)	838 (72%)	2225 (78%)

いる——(a)知人で精神分裂病と診断されたが、入院加療の結果よくなったから、(b)親がこの病気であったが、その子には出ていないから、(c)親も兄弟も健康であったが勉強のしすぎからこの病気になった人を知っているから、(d)この病気は脳の病気ではなく血液の汚れからくると聞いたから、(e)近頃良い薬が発見されて早期に処置すると容易になおるというから。

ここにも優生教育の不徹底さがうかがえるようである。

(12) 躁鬱（そううつ）病とはどんな病気か知っているか——“はい”と答えたもの（表14）

表 14

	学 生	社 会 人	計
男	278 (28%)	148 (21%)	426 (26%)
女	191 (26%)	96 (19%)	287 (23%)
計	469 (27%)	244 (20%)	713 (25%)

精神分裂病とならんで精神病の双幅ともいうべき躁鬱病が、分裂病にくらべて格段に低率であるというのはなぜだろう。躁鬱病患者の数が分裂病患者の数の $\frac{1}{10}$ ³⁾であるというわが国の状況がこのことと関係があるのだろうか。何にしても、分裂病の周知度が98%であるのに比して、躁鬱病のそれが25%というのは意外というほかはない。聞き込みによると、“はい”と答えたものの中にも、躁鬱病とは脚気の別名と思っている大学生がいる。

(13) [(12)の問いに“はい”と答えたものに] この病気は遺伝すると思うか——“はい”と答えたもの (表15)

表 15

	学 生	社 会 人	計
男	175 (63%)	81 (55%)	256 (60%)
女	80 (42%)	44 (46%)	124 (43%)
計	255 (54%)	125 (51%)	380 (53%)

周知度25%で、しかもその中にとんでもない思いちがいも含まれている躁鬱病としては、その遺伝性についての知識はこの程度が常識的であろう。ただ女性学生の率がこの項目に限って低いのが目立つが、回答者の数が総体的に極めて少ないのであるから、大した意味がないのかもしれない。

(14) 精神薄弱とはどんな病気が知っているか——“はい”と答えたもの (表16)

表 16

	学 生	社 会 人	計
男	989(100%)	625 (92%)	1614 (97%)
女	730 (99%)	473 (94%)	1203 (97%)
計	1719(100%)	1098 (93%)	2817 (97%)

精神分裂病とほとんど同じ周知率を示すことは、わが国では精神薄弱の中の重症患者（白痴及び痴愚）だけでも40万を越える（人口千について4.5人）⁴⁾ という実状を反映するものであろう。

学生では男性・女性ともごく少数の“いいえ”があったので、聞き込みを調べてみると、(a)精神薄弱は病気でなく状態の名称だから、(b)その病因の知識を詳らかにしていないから、(c)白痴・痴愚・魯鈍を分けるIQの値を思い出せないから、といったものがある。従って実質的には学生は100

%とみてさしつかえないであろう。

社会人の中にも学生の場合とほとんど同じ理由で、“いいえ”と答えたものもあるが、反面“はい”の中に、精神薄弱とは気の弱い人・やさしい性格・ものおぼえの悪い状態・ぼんやりした人・ノイローゼの別名などと理解しているものもあった。

(15) [(14)の問いに“はい”と答えたものに] この病気は遺伝すると思うか——“はい”と答えたもの (表17)

表 17

	学 生	社 会 人	計
男	465 (47%)	440 (70%)	905 (56%)
女	389 (53%)	271 (57%)	660 (55%)
計	854 (49%)	711 (65%)	1565 (56%)

この項目に限って、学生・社会人・男性・女性がそれぞればらばらの率を示している。考えるに、精神薄弱に内因性のものあり外因性のものあり、しかも果してどれだけが内因性（遺伝性）のものかについての信頼すべき統計も得られていないわが国医学の現状が、精神薄弱に強い関心をもつ青年層にそのまま反映していると考えらるべきであろう。事実、聞き込みによると、精神薄弱のうち外因性のものと内因性のものとどちらが多いのか途惑ったというものがかなりあった。また、主として重症のものは外因性、軽症のものは内因性（遺伝性）と考えたものも何名かあった。

とにかく学問的に明白でない事実に対する回答としての56%は、むしろ正鵠を得たものであり、それだけに認識度の質の良さを示しているといえよう。

5 結 語

前報と同様に、この調査の目的は、単に数量をあげて研究資料を提供し

ようとするもので、何か結論めいたものをここで書くつもりはない。ただ一言だけ感想を述べれば、青年層は一般に人類遺伝学についての知識が意外に浅く、従って優生学についての認識度もかなり低いことを考えると、その対策に十分心をいたすべきであろう。さらに考えるのは、一般大学教育がこの方面の教養を培うのに特にあずかっているようには思われないことである。

最後に、調査及び集計に当って労を共にした亜細亜大学の武部研修の学生諸君に謝意を表する。

注

- 1) 武部啓：民族衛生学研究資料（第1報） 亜細亜大学教養部紀要8号，1968年
- 2) 岡部重穂：血族婚地域における精神医学的一斉調査 精神神経誌59巻，1957年
- 3) 内村祐之：精神医学最近の進歩 医歯薬出版，1960年
- 4) 井上英二・柳瀬敏幸：臨床遺伝学 朝倉書店，1968年
- 5) 厚生省公衆衛生局：わが国における精神障害の現状，1965年

筆者は本学教授・生理学